

盲学校の児童の彫刻作品鑑賞に関する基礎研究

— 文献調査による課題整理を通して —

松浦 藍 ・ 藤田 雅也* ・ 清田 哲男

本研究は、日本美術教育学会の兵庫支部を中心として進められている「福来四郎アートプロジェクト」(以下、FAPと表記)に関するものである。本論では、彫刻の鑑賞に関する先行研究を調査することで、彫刻の鑑賞学習における現状の課題を整理し、FAPに関する研究に期待できることを整理する。本調査では、先行研究の調査期間を2008年から2023年の16年間と設定し、美術教育に関する学会誌の三誌に掲載されている研究論文を対象とした。その結果、本調査から彫刻の鑑賞学習における課題として①視覚情報を前提とした彫刻の鑑賞学習が先行していること、②生涯教育として彫刻の鑑賞学習を捉えにくいことを確認できた。以上の結果から、FAPの研究には、触覚に基づく鑑賞学習としての有用性や、生涯教育の視点からの鑑賞学習の可能性が期待できることを分かった。

Keywords：美術教育，彫刻，鑑賞，触覚，視覚

1 本研究の概要における本論の位置づけ

(1) 本研究の概要と目的

本研究は、日本美術教育学会の兵庫支部を中心として進められている「福来四郎アートプロジェクト」(以下、FAPと表記)に関するものである。

福来四郎とは、昭和20年代から50年代にかけて神戸市立盲学校で教鞭をとった人物である。そして、福来が指導した児童・生徒の粘土造形作品(図1¹⁾(以下、福来指導作品と表記)の内、約2000点が現在神戸親和大学に所蔵されている。福来が指導をしていた当時は、福祉三法により、社会から愛される存在であるよう教育された時代でもある²⁾。しかし、障がい者の捉え方は変化してきている。そこでFAPでは、福来指導作品を取り上げ、小学校、中学校、生涯学習での題材としての活用等によって、社会構造の中に取り込むことを目指した授業研究を行うこととした³⁾。

また、これまでの研究では、福来指導作品を取り上げた授業を「感受アート授業」と命名し、授業検

討や発表を行ってきた。主なFAPの活動概要を図示したものが図2である。なお、現在FAPの研究メンバーは、小学校教員3名、中学校教員4名、高等学校教員1名、大学教員10名の合計18名で構成されており、2022年から現在までの研究活動は、表1に示した通りである。



図1 福来指導作品 中学3年《眼がほしい》

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*静岡県立大学短期大学部こども学科 422-8021 静岡県静岡市駿河区小鹿2丁目2-1

Basic Research on the Appreciation of Sculpture Works by Children in Schools for the Blind
-Through the arrangement of issues based on the literature survey-

Ai MATSUURA, Masaya Fujita*, and Tetsuo KIYOTA

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Department of Children's Studies, Junior College of Shizuoka Prefectural University, 2-2-1 Kojika, Suruga-ku, Shizuoka

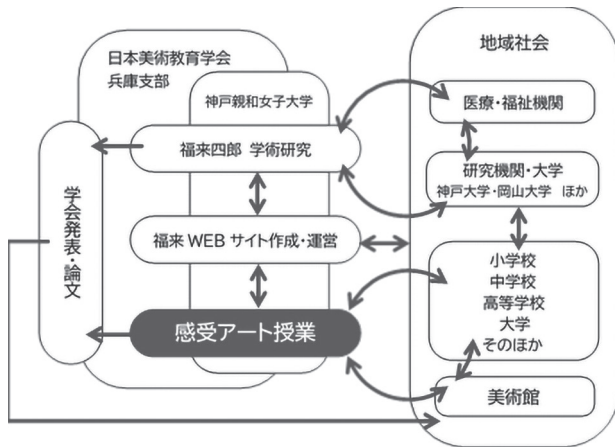


図2 FAPの活動概要を示した図

表1 FAPの活動記録

日時	場所	活動概要
2022年 8月・12月		冊子『福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト 感受アート授業 PROLOGUE』4000冊発行
2022年 8月19日	香川大学	第71回日本美術教育学会 瀬戸内大会 発表
2022年 12月10日	神戸大学	神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 学術WEEKS2022 発表
2024年 8月18日	静岡県立 大学	第73回日本美術教育学会 静岡大会 発表

本研究の目的は、感受アート授業の検討を通して、福来指導作品の現代社会における意義を考察、検討することである。特に、福来指導作品と児童・生徒の出会いにあたる鑑賞活動については、多様な授業展開が予想される。現段階で発行された冊子『福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト 感受アート授業 PROLOGUE』においても、九つの実践中、三つが鑑賞活動を中心とした授業である。このことから、彫刻の鑑賞活動であり、且つ、盲児の作品を取り扱う学習であるFAPの可能性について検討する必要があると言えよう。

(2) 本論文の目的

本論文の目的は、FAPで取り上げる盲学校の児童・生徒の彫刻作品を鑑賞する意義の検討である。これまでの学校教育において、彫刻作品の鑑賞活動に関する研究は散見されるが、文献調査を行った研究は少ない。

そこで、本論文の目的を達成するために、近年における彫刻作品の鑑賞に関する文献調査を行う。そして、彫刻を鑑賞学習として取り上げることの課題を整理する。本論文で得た成果は、今後の研究において感受アート授業を新たに開発し、感受による人

の成長を目指すカリキュラムを構築するための知見となることを期待する。

2 彫刻作品の鑑賞に関する先行研究の調査方法

本論文では以下の手順で、彫刻作品の鑑賞や、盲学校での教育実践に関する先行研究の調査を行う。

(1) 調査対象の学会誌

本論文で調査対象とする学会誌は、J-STAGEとCiniiにおいて、「美術教育」と「学会誌」というキーワードで検索し、該当した日本の学会誌を扱うこととした。そうすることで、日本の美術教育に関する研究を網羅できると判断したからである。

その結果、大学美術教育学会の学会誌『美術教育学研究』、日本美術教育学会の学会誌『美術教育』、美術科教育学会の学会誌『美術教育学』が該当したため、三誌を本論文の調査対象とした。

(2) 調査対象の期間

本論では、調査対象とする期間を、2008年（平成20年）から2023年（令和5年）までの16年間と設定する。この期間は、現在から一つ前の学習指導要領が告示された時期である。

(3) 集計する論文の条件

調査期間に投稿された学会論文の中で、①題名やキーワードに「彫刻」、「鑑賞」や「触覚」等、彫刻作品の鑑賞に関する語句を明記している論文、②①で示した語句以外にも、彫刻作品の鑑賞活動に関する論文、③①や②に該当しなくても論文の考察の中で、校種問わず彫刻作品の鑑賞活動に関して述べている論文の三つの条件に当てはまる論文（以下、彫刻鑑賞論文と表記）を集計することとする。

(4) 集計する際の観点

彫刻鑑賞論文を集計する際の観点は、①各年における論文数、②調査対象者の校種、③研究目的、④彫刻作品の素材、⑤鑑賞作品のモチーフ、⑥調査場所、⑦鑑賞時に使用した媒体、⑧鑑賞の時に働かせた感覚、⑨鑑賞目的である。

3 彫刻鑑賞作品論文の集計結果

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）の期間における論文の本数は1398本であった。そのうち、彫刻鑑賞論文は、30本であり、2.14%であった。第2章（4）の観点で集計した結果を示した後、彫刻鑑賞論文の中でもFAPの目的と関係性が高い先行研究について述べる。

(1) 各年における彫刻鑑賞論文の割合

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）にかけての各年の論文数に対する、彫刻鑑賞論文の割合を各年ごとに算出した（図3）。

図3の顕著な結果として、彫刻鑑賞論文の割合は7.22%の2018年、5.33%の2019年、3.75%の2021年の順に高かったことが挙げられる。

(2) 調査対象者の校種に関する結果

彫刻鑑賞論文において鑑賞活動が実施された調査対象者の校種を集計し、各校種の割合を算出した（図4）。なお、特別支援学校の場合、調査対象者の学年に該当する校種にカウントし、図4では黒色のグラフとして示した。社会人の項目に特別支援学校を含めた理由として、特別支援学校を卒業した社会人を対象とした調査であったからである。また、調査対象者の校種が複数ある場合、それぞれの校種でカウントした。

図4の顕著な結果として、最も高い割合は中学校と小学校の26.67%であったことが挙げられる。ただし、小学校の内6.67%は、「特別支援学校」であっ

た。また、美術館来館者は13.33%であり、3番目に高かった。

(3) 研究目的の各割合

彫刻鑑賞論文で示された研究目的を分類し、集計した。本調査の範囲において、研究目的は「授業方法」、「理論・歴史研究」、「理論・鑑賞方法」、「環境設定」、「教員養成」、「作家・作品分析」と「素材研究」の7項目に分類することができた。各項目の概要と、各項目に該当すると判断した論文を表2にまとめた。

そして、各7項目の研究目的を集計した結果が図5である。なお、一つの論文に二項目の研究目的が設定されている場合、別の項目としてそれぞれカウントした。例えば、授業方法を検討した上で、彫刻作品の教育的意義を検討した論文である場合、「授業方法」にカウント1、且つ「作家・作品分析」にもカウント1と集計した。

図5の顕著な結果として、76.67%の「授業方法」が最も高かったことが挙げられる。次に高い割合は、10.00%の「素材研究」であった。

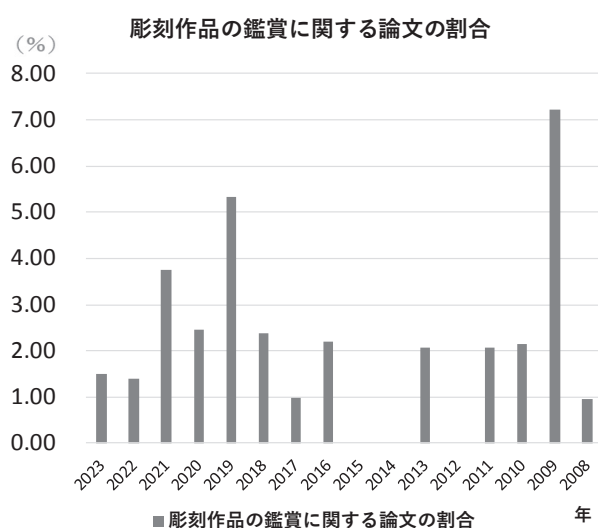


図3 各年における彫刻作品の鑑賞に関する論文の割合

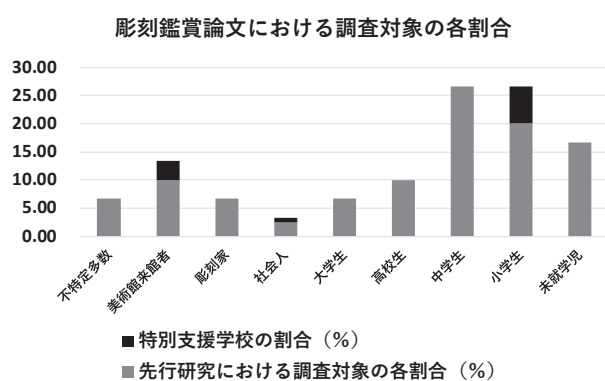


図4 先行研究における調査対象の各割合

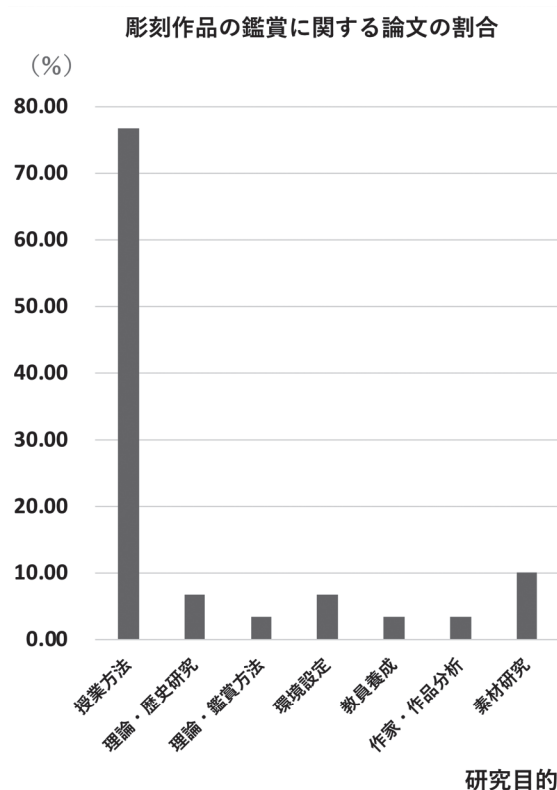


図5 先行研究における研究目的の割合

(4) 鑑賞した彫刻作品の素材の割合

彫刻鑑賞論文において、鑑賞に用いた作品の素材の割合を算出した（図6）。本調査の対象期間において抽出された素材は、「粘土」、「ブロンズ」、「木」、

表2 彫刻鑑賞論文の研究目的の分類

項目名	内容
授業方法	彫刻を取り扱う鑑賞学習の展開方法や指導方法について検討を行っている論文 【例】 藤田雅也「立体形状の選好と配置が触る行為に及ぼす影響—中学生を対象とした実態調査の分析を基に—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 56(1), 2023, pp.273-280.
理論・歴史研究	彫刻を取り扱う鑑賞や鑑賞学習の歴史的な変遷について検討を行っている論文 【例】 武末裕子「自分の子ども心に触れる描画活動「触覚と彫刻の関係性について」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 52(1), 2020, pp.225-232.
理論・鑑賞方法	彫刻を取り扱う鑑賞学習の授業方法の理論的な背景等について検討している論文 【例】 半田こづえ・宮本温子「触覚による彫刻鑑賞における鑑賞過程 視覚障害のある鑑賞者の発話プロトコルに基づく分析」『美術教育学』美術科教育学会, 39(1), 2018, pp.263-274.
環境設定	彫刻を取り扱う鑑賞学習を行う際の環境設定や学習状況に関する検討や先行研究で示された理論に関する検討を行っている論文 【例】 市川寛也「彫刻の場としての公園に関する一考察—1950年代から60年代にかけての都市公園・児童公園の事例から—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 48(1), 2016, pp.73-80.
教員養成	彫刻を取り扱う鑑賞学習を実施するために教員に必要な力の検討や、教員養成研修の実施方法について検討を行っている論文 【例】 永江智尚「中高美術科教員養成におけるモデルを用いた彫刻教育の指導法の研究Ⅰ」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 49(1), 2017, pp.257-264.
作家・作品分析	彫刻を取り扱う鑑賞学習で取り扱う彫刻作家や作品について検討を行っている論文 【例】 竹本悠太郎「彫刻制作におけるモノの働きと制作者の思考—素材のリズムと制作行為の相補関係を手掛かりに—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 53(1), 2021, pp.145-152.
素材研究	彫刻を取り扱う鑑賞学習で取り上げる作品の素材についての検討を行っている論文 【例】 真宮美奈子・竹井史「「ねんど場」における遊びの様相とその援助—保育教材としての土素材による子どもの学びに着目して—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 50(1), 2018, pp.329-336.

「石」、「石膏」、「樹脂」、「テラコッタ」、「乾漆」、「鉄」、「ガラス」であった。1本の論文だけで取り扱われていた素材は「その他」とした。「その他」に含まれる素材は、「布」、「パプリカ」、「繊維強化プラスチック」、「紐」、「ゴム」である。

また、複数の素材で作られた彫刻作品や、多様な素材の彫刻作品を複数取り上げた授業である場合、各素材でカウントした。

図6の顕著な結果として、最も高い割合が20%の「粘土」であったことが挙げられる。「粘土」には、焼成した陶彫も含まれている。次に高い割合の素材は、13.33%の「ブロンズ」、「木」、「石」であった。また、最も低かった割合の素材は、3.33%の「ガラス」と「乾漆」であった。また、「その他」は40.0%であるが、前述した通り取り扱っていた論文が1本のみであったため特筆しない。

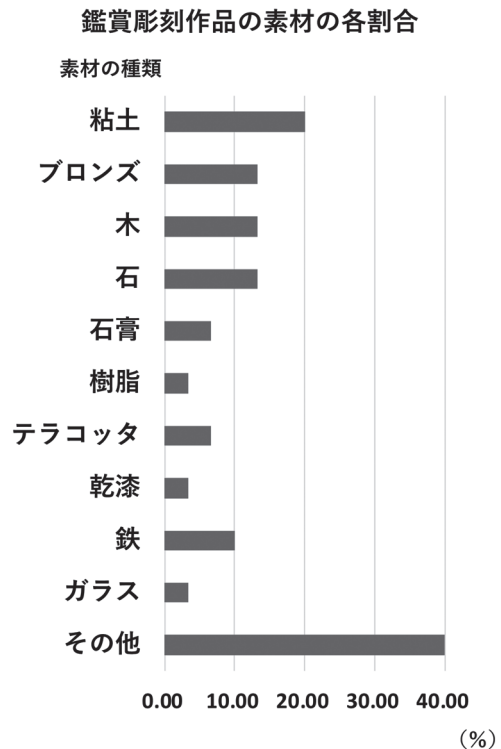


図6 鑑賞彫刻作品の素材の各割合

(5) 鑑賞した彫刻作品のモチーフ

彫刻鑑賞論文において、彫刻作品のモチーフを種類ごとに集計した(図7)。本調査において取り扱われていたモチーフは、「人物」、「動物」、「静物」、「無機物」、「抽象」と「素材そのもの」であった。「素材そのもの」とは、彫刻作品に用いられることが多い「粘土」や「ブロンズ」を物質として触ったり見たりする調査であったことを示している。また、「その他」とは、論文において彫刻作品のモチーフに関して具体的な記載がなかったことを示している。

複数種類のモチーフで構成された彫刻作品や、モチーフが異なる彫刻作品を複数取り上げた授業の場合、各モチーフの種類としてカウントした。

図7の顕著な結果として、最も割合が高かったモチーフは46.67%の「抽象」であり、次に割合が高かったのは、33.33%の「人物」であったことが挙げられる。最も割合が低かったのは、3.33%の「静物」であった。

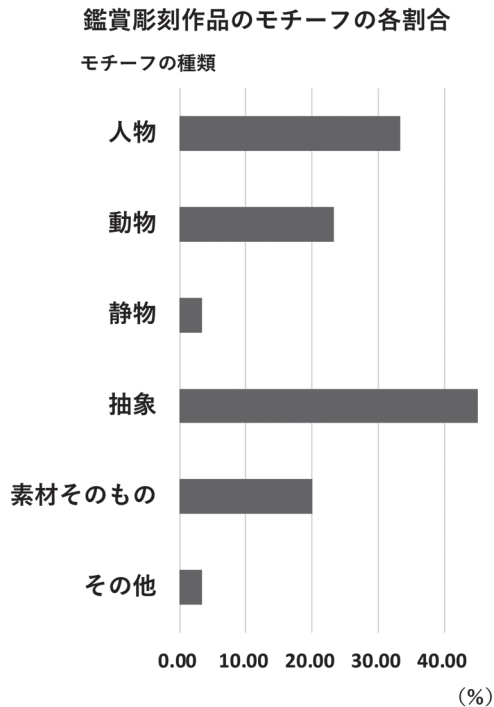


図7 鑑賞した彫刻作品のモチーフの種類の各割合

(6) 調査場所

彫刻鑑賞論文において、調査を実施した場所の割合を集計した(図8)。本調査の実施場所の項目は、本章(2)調査対象者の校種と対応するが、「福祉施設」や「特別支援学校」が加わっている。なお、小学校において、特別支援学級の児童を対象として

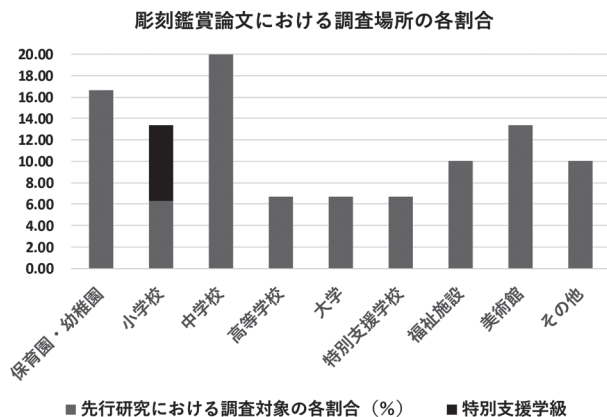


図8 彫刻鑑賞論文における調査場所の各割合

いる場合は、実施場所を「小学校」とカウントし、グラフにおいて、黒色で示した。

図8の顕著な結果として、最も多い割合は20.00%の「中学校」であり、次に高い割合は16.67%の「保育園・幼稚園」であったことが挙げられる。さらに次に高い割合は「美術館」の13.33%であった。

(7) 鑑賞時に使用した媒体

彫刻鑑賞論文の調査において、鑑賞作品を鑑賞者に提示する際に用いた媒体(以下、鑑賞媒体と表記)の割合を集計した。「素材」とは、鑑賞する彫刻作品の素材そのものを鑑賞したことを示している。ただし、彫刻鑑賞論文30本の内、4本の論文においては鑑賞活動を実施せず、先行研究や文献による調査であったため、図9で示した割合の合計は、96.67%となる。なお、鑑賞媒体を複数用いた場合も、各項目に集計した。

図9の顕著な結果として、最も多い割合が36.67%の「彫刻作品」であり、次に26.67%の「素材」であったことが挙げられる。また、「その他」には、「作者の彫刻制作時のメモ」や「作者のアイディアスケッチ」も作品と併せて鑑賞する場合と、「身の回りの日用品」を作品として鑑賞する場合とがあった。

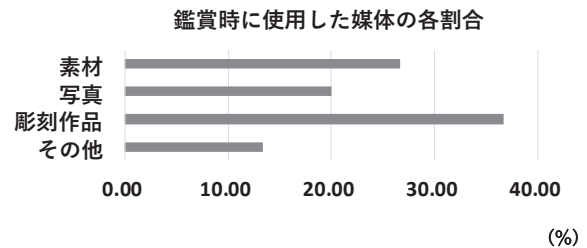


図9 鑑賞時に使用した媒体の各割合

(8) 鑑賞時に働かせる感覚

彫刻鑑賞論文の調査において、鑑賞時に働かせる感覚の割合を集計した(図10)。鑑賞時に彫刻作品をみただけの場合や、プリント等に印刷された写真を鑑賞した場合は「視覚」とカウントした。また、彫刻作品や彫刻作品の素材を見ずに、直接触って鑑賞した場合は、「触覚」とカウントした。そして、彫刻作品や彫刻作品の素材を見て、触った場合は「視覚と触覚」とカウントした。ただし、彫刻鑑賞論文30本の内、4本の論文においては鑑賞活動を実施せず、先行研究や文献による調査であった。そのため、図10での各項目の割合の合計は、86.67%となる。

図10の顕著な結果として、最も高い割合は40.0%の「視覚と触覚」であり、割合が最も低かったのは20.00%の「視覚」であったことが挙げられる。

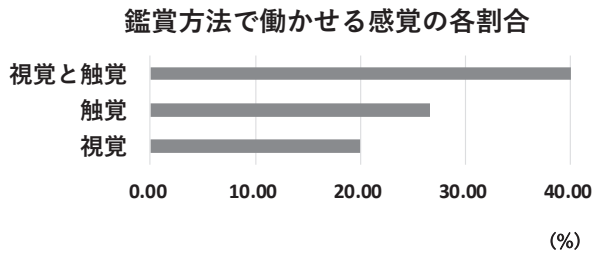


図10 子ども作品論文における作品種類の各割合

(9) 鑑賞の目的

彫刻鑑賞論文の調査において、鑑賞活動の目的を集計した(図11)。「表現活動」は、彫刻の鑑賞後、表現活動を行う流れの調査であり、「作品理解」は、鑑賞した彫刻作品に関する知識を習得することを意図とした調査であり、「作品想像」は鑑賞した彫刻作品から調査対象者が感じたこと、印象や想像したことを示す項目である。

図11の顕著な結果として、最も高い割合は36.67%の「表現活動」であり、次は33.33%の「作品想像」であったことが挙げられる。また、「作品理解」は6.67%であることから、本調査において鑑賞活動だけを行った割合は、40.00%であった。

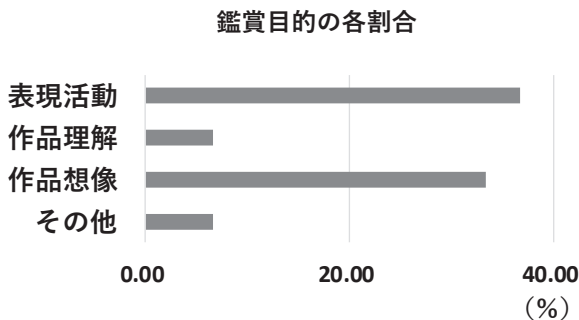


図11 鑑賞目的の各割合

(10) 本論文の目的に関する先行研究

彫刻鑑賞論文において、本論文の目的と特に関連性が高い論文について詳述する。

①盲学校と美術教育に関する先行研究

盲学校における美術教育に関する先行研究として、鹿島萌子の研究が挙げられる。鹿島は、「触る」という行為を「形や素材感を認識する知的な体験」だけでなく、『心動かされる』『イメージを創造する』といった精神的あるいは美的な体験にもなりうる」と主張した⁴。鹿島の主張において特筆すべきは、「美的な体験」となりうるのは「視覚障害(引用ママ)の有無に限らない」とした点である。

また、この主張は多胡宏の研究とも通ずる。多胡は、1980年代から90年代にかけて、日本の4か所の盲学校とギャラリーの活動を調査し、盲学校にお

ける美術教育の変遷をまとめた⁵。盲学校やギャラリーで作品集を作るに至った経緯について、多胡は以下の通り述べている⁶。

作品集は広く社会に頒布されるので、それを手にした人達は盲学校の図工や美術の授業について、あるいは子供達の表現について理解する拠り所となる。

さらに多胡は盲学校の美術教育の在り方や子どもたちの学びへの「社会的な関心を集め、理解を広めた功績」があると述べ、その成果を活用する必要性を主張している⁷。多胡の研究では、本研究で取り上げた福来による実践についても言及されている。しかし、多胡の論文が発表された2019年以降、本論文の文献調査の範囲において、研究論文での検討はなされていない。

また、具体的に視覚障がい者の触覚による鑑賞の過程を分析した半田こづえと宮本温子らの研究もある。半田らは、触覚による鑑賞では、①「作品全体の把握」、②「モチーフの分類」、③「モチーフの特定」、④「確認・分析」、⑤「解釈・評価」の過程を経て行われると述べられた⁸。この鑑賞の過程が、鹿島の研究のように、視覚障がいの有無に関わるかについて検討することもFAPでの課題と言えよう。

盲学校に限らず、視覚障がい者と美術との関連で言えば、2021年に出版された川内有緒の『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』⁹の出版により、視覚情報を前提としない美術鑑賞への意義を検討する傾向が高まっている。さらに、自身が全盲である広瀬浩二郎は「“さわる”をテーマとする各種イベント」として「ユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめる博物館)」を日本各地の美術館で開催している¹⁰。美術教育以外の取り組みからも、多胡が指摘したように、盲学校で得た学びの成果を、社会全体に学びとして還元する実践の必要性が窺える。

②触覚と彫刻の鑑賞の関係性についての先行研究

触覚による彫刻の鑑賞に関する研究として、竹本悠太郎の研究が挙げられる。竹本は、『ふれる』ことは対象との相互的な関りであるだけでなく、他者との『信頼』と呼べるほどの深い関係をつくる働き」と述べている¹¹。つまり、竹本は触覚による鑑賞には、制作者と作品との関係性を深める役割があると主張しているのである。さらに、触覚による鑑賞を通して「発信者である制作者の思考する身振りを、受信者が自らの身体的な経験と重ねて解釈」できると竹本は述べる¹²。FAPにおいて言えば、実際に福来指導作品に触る機会を確保できることが、制作者の思いを感じ取ることを促すとも言えよう。

また、触覚によって作品との関係性を深めることに関して、武末裕子の研究でも言及されている。武末は、前項で先述したように触覚を切り口とした展覧会や研究が多く見られるようになった背景も含め、触覚と彫刻の関係について検討している。武末によれば「彫刻独自の多視点的視覚性は触覚的経験値により強化される」と述べ、触覚による「作品独自の世界観」へと導かれていると主張している¹³。武末の触覚によって「より強化される」という主張は、佐藤学が述べる「円環運動」との関連性が高い。「円環運動」とは、芸術における活動を示すものである（図12）¹⁴。具体的には、佐藤は「自己の内から発して世界と交流し再び自己へと回帰する円環状の軌跡を描いている¹⁵」と述べている。つまり、竹本や武末の主張のように、触覚による彫刻の鑑賞には「円環運動」の「外」から「内」へと回帰する流れを強める役割があると解釈できる。ただし、「内」から「外」への動きである表現活動だけが重視された場合、佐藤は「経験の空洞化と個性の喪失を促進する」¹⁶と指摘した。これらの先行研究からも、彫刻作品という「外」の存在から鑑賞者の「内」への動きを促す役割を持つ触覚は、芸術活動において必要であると言えよう。

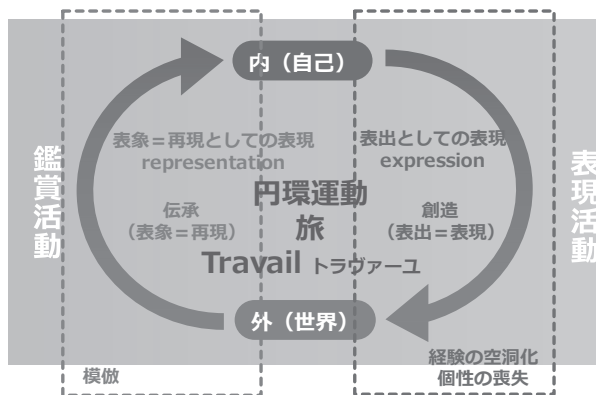


図12 円環運動の図（本文を基に清田が作成）

4 考察

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）の期間における彫刻鑑賞論文の集計結果から、現在の美術教育における彫刻の鑑賞学習に関する課題を整理する。その上で、彫刻の鑑賞学習で期待できるFAPの役割を検討する。

（1）彫刻の鑑賞学習における課題

①視覚情報を前提とした彫刻の鑑賞学習

本文献調査結果では、彫刻の鑑賞学習に関する研究は2.14%であり、検討の余地があると言えよう。また、彫刻の鑑賞媒介として「彫刻作品そのもの」

の割合が36.67%と最も高かった。しかし、彫刻作品の「写真」と併せて、「素材」や「制作時のアイディアスケッチ」を提示した場合も含めると、彫刻作品以外を鑑賞した調査の方が多いと言えよう。その要因は、美術館以外の場所で彫刻作品そのものに触わる機会を設ける困難さであった可能性は高い。図10の結果からも、「触覚」だけの鑑賞学習は26.67%であり、「視覚と触覚」と「視覚」を働かせる鑑賞学習の方が多い現状である。ただし、鑑賞する彫刻のモチーフが「抽象」表現の割合が高かった結果からは、具体的なモチーフの作品を鑑賞することは視覚情報に影響を受けやすいことが予想される。

②生涯教育としての彫刻の鑑賞学習の捉えにくさ

彫刻鑑賞論文において、義務教育期間の児童・生徒を対象とした調査が半数以上であるのに対し、高等学校、大学や社会人への調査は少ない。また、彫刻鑑賞論文の研究目的の76.67%が「授業方法」であった。これらの結果からは、美術科や図画工作科での彫刻の鑑賞学習方法への関心が高いと言えよう。そのため、多胡が主張したように生涯教育として捉えられにくい現状であると言えよう。しかし、第3章（8）で取り上げた生涯教育の視点から鑑賞の意義を提案した川内の書籍や、視覚だけでなく触覚による美術作品との関わり方を検討した廣瀬の研究もある。そして、竹本や武末の主張のように、美術教育での鑑賞学習の成果を検討されているものの、社会全体への成果を活用の検討までには至っていないと言えよう。

（2）彫刻の鑑賞学習で期待できるFAPの役割

本調査を通して福来指導作品を取り上げる鑑賞活動へ期待できることは、二つあると考える。以下は、その詳細である。

①触覚に基づく鑑賞学習としての有用性

文献調査による彫刻の鑑賞学習の傾向から、視覚情報に傾倒した実践研究の多さが課題として挙げられた。その要因として、彫刻作品を学校の授業で用いる機会の少なさと、触覚だけによる鑑賞学習の事例の少なさが挙げられる。

そのため、福来指導作品は感受アート授業に貸し出しが可能であることにより、一つ目の要因への対応が可能となる。二つ目の要因へは、視覚情報の再現ではなく、触覚に基づいて制作された作品であるため、児童・生徒の触覚への意識付ける役割を期待できよう。

②生涯教育の視点からの鑑賞学習の可能性

文献調査による彫刻の鑑賞学習の傾向から、盲学校で検討された美術教育の成果を、社会全体に還元

する実践については検討の余地があることを確認できた。換言すれば、第1章で「感受アート授業の検討を通して、福来指導作品の現代社会の中での意義を考察、検討すること」と述べた目的と合致する。

以上のことから、FAPによる研究の必要性や独自性を確認できたと言えよう。

5 今後の展望

本論文では、彫刻の鑑賞に関する先行研究を調査することで、彫刻の鑑賞学習における現状の課題を整理し、FAPの研究に期待できることを確認できた。一つは、触覚に基づく鑑賞学習としての有用性であ

る。もう一つは、生涯教育の視点からの鑑賞学習の可能性である。

しかし、現段階では、社会人への教育的意義を見出すにはFAPの研究メンバーだけでは足りない。FAPの参加メンバーは、2024年8月の段階で、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校の教員で構成されている。そのため、感受アート授業は、子どもの成長を未就学児から大学生までの流れで捉えられると言えよう。以上のことを踏まえ、今後の課題は、児童・生徒や学生だけでなく社会人を対象とした実践を行うことや、感受アート授業の成果を精査することと考える。

註

¹ 一般社団法人日本美術教育学会 兵庫支部『福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト 感受アート授業 PROLOGUE』2022, p.8.

² 文部科学書HP, 2010年7月, 第4回 日本の障害者施策の経緯, 2024年8月1日閲覧, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1295934.htm#:~:text=%E6%88%A6%E5%BE%8C%E7%9B%B4%E5%BE%8C,1951%E5%BC%89%E3%81%8C%E5%88%B6%E5%AE%9A%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E3%80%82

³ 一般社団法人日本美術教育学会 兵庫支部, 同上, p.2.

⁴ 鹿島萌子「『触る』という美術鑑賞方法の可能性」『美術教育』日本美術教育学会誌294号, 2011, pp. 8-15.

⁵ 多胡宏「日本の盲学校における美術教育の変遷に関する研究と展望—1980年代から90年代にかけての事例から—」『美術教育学研究』大学美術教育学会誌51号, 2019, pp.201-208.

⁶ 同上, pp.201-208.

⁷ 同上, pp.201-208.

⁸ 半田こづえ・宮本温子「触覚による彫刻鑑賞における鑑賞過程 視覚障害のある鑑賞者の発話プロトコルに基づく分析」『美術教育学』美術科教育学会誌39号, 2018, pp.263-274.

⁹ 川内有緒『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』, 集英社

¹⁰ 廣瀬浩二郎のリサーチマップ, 2024年8月1日閲覧, https://researchmap.jp/hirose_kojiro.

¹¹ 竹本悠大郎「制作者の思考や感覚を伝えるとはどういうことか—触覚の働きに着目したワークショップの実践を彫刻制作者の視点から振り返って—」『美術教育学研究』大学美術教育学会誌54号, 2022, pp.169-176.

¹² 同上, pp.169-176.

¹³ 武末裕子「触覚と彫刻の関係性について」『美術教育学研究』大学美術教育学会誌52号, 2020, pp.225-232.

¹⁴ 佐藤学『学びの快楽』, 世織書房, 1999, pp.243-260.

¹⁵ 同上, p.245.

¹⁶ 同上, p.246.